

## ラクダに珍しがられた話

### ラクダに珍しがられた話

これまたアフリカでの経験。

が、それはひとまず置いて、それより以前には……。ラクダにまつわる思い出を心の中に探ってみる。うーん、ラクダという動物を知らないわけではない、といった程度だ。

あえて引っ張り出すなら『月の沙漠』という童謡。あんなかにラクダが出てきた。



月の沙漠を はるばると

旅のらくだが ゆきました

金と銀との くらおいて

二つならんで ゆきました

金のくらはに 銀のかめ

銀のくらはに 金のかめ

二つのかめはそれぞれに

ひもで結んで ありました

幻想的な歌で好きだったが、でも何だかちよつとウソっぽい、とこども心に考えていたような気もする。「金の

## ラクダに珍しがられた話

くらはには「銀のかめ」もそうだけど、あのラクダの背中にどうやって鞍を置き、その上にどう甕を結ぶのか、考える  
と不安定で、眼が冴えて寝つけない気分だった。

それとは別に、この『月の沙漠』の歌詞には「一カ所、確かな間違いがあるそうだ。「おぼろにけふる 月の夜を」という件りで、砂漠は非常に湿度が低い。ゆえに砂漠になった」ので、朧月夜という現象はあり得ないのだとか。

それでもなぜだか、ラクダと朧月夜はよく合うような気がする。幼くして聞きなじんだ情景が心に焼き付いているせいかもしれない。これこそピカソの言う「芸術は嘘を真実に変える」現象だろう。

その『月の沙漠』を踊ったことがある。小学校二年か三

年のことだ。

学芸会というのがあって、歌やら劇やら踊りやら、みんなが何かの役を与えられ、私は仲良しだった礼子ちゃんと二人で『月の沙漠』を踊ることになった。

三番の歌詞に、

先のくらはには王子さま

あとのくらはにはお姫さま

乗った二人は おそろいの

白い上衣を 着てました

とあるように、私より小柄でかわいらしい礼子ちゃんが

## ラクダに珍しがられた話

お姫さまになり、私が王子さまになって、それらしい扮装で踊る。

衣装は母が大張り切りで作った。白い上衣はブラウスで間に合うが、問題はボトム。母は古い毛布を引っ張り出してきて、王子さま用に足首をくくったトルコ風のパンツを作ってくれた。色もまさにラクダ色。おじいさんの股引の色だ。ラクダの背に揺られていくのだからこの色がいい、と母が考えたはずはない。物資が乏しい時代、我が家にはこれしかなかったのだ。

頭に白い布を巻き、それをリボンか何かで押さえて、礼子ちゃんと私は舞台上上がった。

広い砂漠を　ひとすじに

二人はどこへ　ゆくのでしょう

おぼろにけぶる　月の夜を

対のらくだは　とぼとぼと

砂丘をこえて　ゆきました

だまってこえて　ゆきました

ダンスの振付はたぶん担任の先生がした。といっても、歌詞のとおり、だまっつとぼとぼ歩くだけなので、たいしたことではない。王子さまの私が先に立って、ふたり歩調をそろえて斜め前に歩き、あとはぐるりと回ったりなんかしたかもしれない。

## ラクダに珍しがられた話

踊りそのものは問題なかったのだが、机を並べて作った舞台が一步進む度にガタコト揺れる。それが気になってしかたなかったのと、もう一つ、自分がいっているパンツがじつは古毛布の改造だと誰が見てもわかるのではないかと、そんなことも気になって、なんだか憂鬱だった。

そののち舞台で踊ったことは数え切れないが、そのなかでも『月の沙漠』が一番パツとしないダンスだ。

ラクダにまつわる私の思いは、長い間、それがすべてだった。

\* \* \*

それから半世紀近い年月が過ぎて、私はアフリカの地を踏む機会に恵まれた。そのいきさつは『キリンになめられた話』に書いたので、ここではくり返さない。

ケニア在住の友人があちこち連れ歩いてくれて、滞在も終わりに近づいた頃、ナイロビ郊外のカレン・ブリクセンの家を訪れた。

カレン・ブリクセンはオランダの女流作家で、私は小説を読んだことはなかったのだけど、彼女が書いた『アフリカの日々』*Out of Africa* を映画化した『愛と悲しみの果て』に感動、より正確には主演したメリル・ストリープとロバート・レッドフォードが深い印象を残していたので、女流作家の住んだ家に映画のシーンを重ね合わせて感慨深

## ラクダに珍しがられた話

く見学した。

それはしつとりしたヨーロッパ風の木造平屋建てで、映画と同じように居間のぐるりを広い回廊がめぐっていて、まことに風通しのいいところがアフリカ風だった。広い庭を高い木立が取り巻き、それを抜けると広大なコーヒー園があったはずだ。

泥臭いアフリカの原野にどっぷり浸った数日の後で、何がなしヨーロッパの香りにふれた数時間は、焼けつく陽光をしばし逃れた日陰のように涼やかで心地よかった。

その帰り道だった。私たちの車は、そこそこ整備された道を辿っていた。といっても舗装されているわけではなく、ただ、さほどでこぼこでない程度。道幅は車がどうにかすれ違ふことができるくらいだ。それでも前後には他の車も

見えず、穏やかなドライブだった。

と、車がふいに路肩に寄って、止まった。どうしたのかな、と思つて見ると、背後からラクダがやって来る。それも一頭や二頭じゃない、数頭でさえない。数え切れないほどたくさんラクダが列をなしてやって来て、車の脇を通り過ぎていく。

そばで見ると、ラクダはとても大きい。知ってはいたが、しかし実際に見た感動というのは知る知らないとは別のことだから、うわあ、大きいくと、ひたすらそのことに感じ入って、車の窓から首を出して眺めていた。

と、列の中の一頭が車中の私たちに目を止めて、首をこちらへ伸ばしてきたのである。ラクダは体も大きいが、と

## ラクダに珍しがられた話

うぜん、顔も大きい。それがぐーんと、文字どおり目と鼻の先に寄ってきて、私たちを眺めている。見物しているつもりが気分が吹っ飛んで、見物されている小動物の心持ちになった。そう、庭先でセントバーナード犬に見つかってしまったモグラといたらいいか。

身動きもならずじっとしていると、向こうも二頭ばかりで首を並べて、しげしげと見る。しかしその表情、というか目つきは決して險悪でも凶暴でもなく、さりとして例のキリンのように、めっちゃ親しげでもなく、言うならば興味津々。珍しいものがあるねえ、面白いねえ、といったふう。私たちは、ただ畏怖して、その鷹揚にして愉快げな眼差しに耐えていた。

じっくり眺めて満足したのか、そのラクダはまた頭をもたげて、仲間の行進に合流した。ラクダが私たちに顔を寄せていたのは、ずいぶん長い間のように思えたけれど、ただか数分、いや数十秒のことだったかもしれない。

ラクダの列はいつになっても終わらなかった。途中で、群れを率いている中年の男性が、これまたあのラクダ同様に、私たちを覗きこんだ。彼のほうは赤いマサイ族の服を着ていたから、時と場所によってはおおいに注目されたはずだったが、その時の私たちにとっては、もはや珍しくもなんともなく（なにしろ、ただのニンゲンなので）、さしたる感動もなしに目顔で挨拶を交わしたことだった。

悠揚と遠ざかるラクダたちの歩みは、しかし『月の沙漠』

## ラクダに珍しがられた話

にあるような「とぼとぼ」といった風情ではまったくなかった。むしろ、一步一步が「どっしり、どっしり」していて、じつに頼もしい。その後ろ姿を見ながら、しみじみと、アフリカだなあ、と私は思っていた。これほどたくさんのラクダがすこぶる日常的に思えてしまう、そのところがじつにアフリカなのだなあ、と。

だいぶ後になってアフリカに詳しい人にその話をしたところ、ラクダはとても気むずかしい動物で、そんなふうになつこい表情を見せることは少ないんだよ、と言われた。それがほんとうかどうか、「月の沙漠をどこまでも」人間とともに歩んでくれるのだから、気むずかしいとは言えないように思うが、そういえば、あの一頭の他は、私たちの

ほうは見向きもせず、黙々と横を通り過ぎて行った。とすれば、あのラクダだけちよつと変わっていたのかもしれない。

変わったラクダに出会ってよかったと、今は思う。

(次頁に写真) ↓

(初出 ホームページ「佐々木涼子の部屋」二〇一七年四月)

ラクダに珍しがられた話





ラクダに珍しがられた話

